

令和5年度 【 学園研究費助成金< A > 】研究成果報告書

学部名 国際コミュニケーション学部

フリガナ イワノノブヒロ
氏名 伊藤信博

研究期間 令和5年度

研究課題名 国際的な和紙・型紙・装飾品の再認知と西欧のジャポニズムへの影響

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	伊藤信博	国際コミュニケーション学部	教授
研究分担者	広瀬正浩	国際コミュニケーション学部	教授
研究分担者	村井宏栄	国際コミュニケーション学部	准教授
研究分担者	田所光男	国際コミュニケーション学部	教授
研究分担者			

研究要旨

日本文化と西欧文化の繋がりを染織「型紙」文様をキーワードに、西欧におけるジャポニズム発展史とともに総合的に明らかにし、書誌学的な研究の発展にもつなげる研究を行う。また、この研究から、

- ◎海外における染織型紙収蔵の経緯やいつ頃所蔵されたのか。
- ◎染織型紙の状態などを明白化。
- ◎染織型紙と同時に、見本帳や型染めの着物などを収蔵した形跡の有無なども確認
- ◎染織型紙と絵写本・絵巻の表装の関連性の明白化をリスト化。
- ◎壁紙や内装デザインの歴史とジャポニズムの影響度の確認。
- ◎染織型紙と書物文様の関係性
- ◎染織型紙の海外での受容が、壁紙やデザインなど純粹に美的・造形的な側面に偏重している可能性や「手本」としての受容からジャポニズムに発展した可能性

そして、このような研究から、忘れられた日本文化である型紙に焦点を当て、型紙と版本や絵写本の文様の相互関係を立証し、日本と西欧相互に渡る広がりのある世界的な文化遺産継承のための方法論を確立する。こうした目的の基本的基盤形成のため、歴史文化館や図書館、さらに、フランス・コルマルでの展示会やセミナーを企画した。

1. 本研究開始の背景や目的等 (600～800 字程度で記述)

染織型紙は日本のジャポニズム研究からは等閑視されて来ており、美術品扱いもされていない、「道具」の扱いである。「道具」としての型紙は「商品」としての型紙であり、宝暦3年(1753年)8月に型紙販売に関する特権的株仲間が公認され、三重県の白子・寺家・江島の行商株が与えられ、文政6年(1823年)には江戸出稼ぎ株も公認されている。文化庁の調査官である生田ゆき氏は2007～08年に鈴鹿市所蔵古代型紙(約1800枚)の調査や2010年からは海外所蔵の型紙の調査(モスクワ、ベルン(左)、ウィーン(中)、ザンクトガレン、シュトゥットガルト(右)、ロンドン、サンタ・バーバラ、ボストン、ドレスデン、チューリッヒ、パリ、ストラスブール、ミュールーズ)などの調査に伊藤も協力し、継続的に調査を行っているが、収蔵の経緯について詳細な記録が残されていない場合が多く、型紙と同時に、見本帳や型染めの着物などを収蔵した形跡は、大半において確認できない現状がある。また、型紙の海外での受容は、純粋に造形的な側面に偏重しているのであり、美術品扱いなのである。伊勢型紙彫型画会の大杉華桜氏はそうした「道具」としての型紙や「商品」としての型紙に反発し、美術品としての認知を型紙に模索している。

ところで、スイスやアルザス地方の美術館に所蔵される日本の染織型紙をマニュアルとして、特にアルザスでは洋服や壁紙デザインを近代初期に創作しており、ジャポニズムの派生やアールデコにも大きな影響を与えている。つまり、日本では「道具」としての染織型紙が、西欧では壁紙や洋服デザインの「手本」に変容し、応用美術の発展に寄与している。

そこで、型紙作品の展示会を眉山およびアルザスで行い、美術品としての認知を高める計画を進めたいと考えたのである。そして、型紙を通して、西欧の文化を形成してきている歴史を明らかとしたいと考えたのである。また、こうした染織型紙文様は日本においては、絵写本や版本表装文様や紙料文様にも同構図が使用されている。そこで、この染織型紙文様をテーマに、日本文化の世界的な文化遺産として絵写本・版本の表装文様や染織型紙文様の文様別リスト作成により、四季表現などの分類、版本表紙文様との比較から染織型紙文様との関係性を問い、書誌学的な研究も取り入れ、日本と西欧の繋がりを「染織型紙」をキーワードに、西欧でのジャポニズム発展史研究も含め、型紙文様の全体像を明らかにすることを研究目標とする。そして、ストラスブール大学との共同展示やセミナーなども企画することから、教員の交流促進にも寄与できると考えている。

2. 研究の推進方策 (400 字程度で記述)

ストラスブール大学とは国際研究集会『日本における知識伝承』(遠隔参加)「東西の美と日本文化ー日本の文化が西洋に与えた影響について」を2022年3月に共同で行っている。また、近隣の大学であるハイデルベルク大学とも国際研修集会で、「奈良絵本・古今著聞集(チェルヌスキ美術館蔵)と元禄版本の画像比較から見る問題点」『近世日本の絵本、絵巻から読みとる写本・版本文化の狭間』などを眉山女学園大学共同主催(頭脳循環後の発展)で、2021年3月に行っている。この頭脳循環とは研究代表者が「室町後期から江戸期の絵写本・版本研究を通じた日本学研究与西欧とのネットワーク構築(2017～2019年)を主導し、日本学術振興会から助成を受けたものである。

このような研究成果を踏まえ、型紙と版本表紙の関係性を科学研究費(基盤A)「表装文様を中心とした日欧比較による写本・版本研究と国際的写本研究の基盤形成」を提案している。また、「絵ものがたりメディア文化遺産の普遍的価値の国際共同研究による探求と発信」(分担者・2016～2019年)で、型紙の国際共同研究を東アジア文化研究センター、ストラスブール大学、チューリッヒ大学東アジア芸術史学科)、生田ゆき(文化庁・文化財調査官)らと共同で行っており、将来的な国際共同研究の展望が大きく広がるであろう。

3. 研究成果（1000字以上で記述）

①図書館での研究代表者が所蔵する和紙・型紙・装飾品の展示会（5月～7月）－具類の美術品的価値を一般に図ることを企画したが、装飾品の「貝合わせ」を展示した。

②型紙の美術的価値の認知のため、大杉華桜氏制作の型紙展示会を歴史文化館で行い、同時にセミナーを開催（9月～12月）した。

③研究目的に従い、購入する資料や所有する資料の文様分析を行った。また、これまでの西欧での型紙調査の詳細な分析を学生と共同で行い、その結果、西欧で美術品とみなされる作品の多くが、草花を描く作品が多いことや精緻な作品が多く収集されていることから、日本の「美」（細かい丁寧な作業）の観念が西欧に受け入れられ西欧のジャポニズムの発展につながったことが明らかになった（現在詳細な分析を執筆中である）。また、それらの植物は春夏秋冬の中でも春と秋が多いことから、日本の制作現場での傾向や着物の柄のモチーフ選びも考察に必要であることが分かった。

④CEEJA（欧州・アルザス日本学研究所）と共同で、講演会、型紙展示会、セミナーを開催（2月初旬からの予定であったが、三月に行うこととなり、二月にその下準備のため渡仏した。その際にストラスブールの装飾美術館（新たに型紙発見の連絡があり、その調査準備も兼ねた渡仏であった）を訪問した。展示会であるが、ストラスブール市立版画美術館の型紙やミュルーズ装飾美術館の協力も得る。また、日本からは大杉華桜氏制作の型紙を展示し、大杉氏と伊藤の講演会も実施する。なお、アルザス領事館の協力も得た。

⑤将来的な型紙や和紙の振興、輸出を計るため、アルザス開発公社やCEEJAの協力を得た。

以上のような計画からは、学問的には上述した染織型紙の海外での受容が、壁紙やデザインなど純粋に造形的な側面に偏重している可能性や「手本」としての受容からジャポニズムに発展した可能性を探った。そして、忘れられた日本文化である型紙に焦点を当て、型紙と版本や絵写本の文様の相互関係を立証し、日本と西欧相互に渡る広がりのある世界的な文化遺産継承のための方法論を確立しようと試みたのである。

一方で、この研究は社会的産業として衰退している型紙やその材料である和紙の普遍的価値を高める運動を通して、失われた日本文化の再考を模索したものである。また、アルザス・コルマルは、2027年にマンガ美術館の設立を目指しており、型紙展示会もその一環として認知されたのも研究成果の一つである。

また、明治以降型紙は磁器の輸出用大量生産のため使用されており、明治の産業にも貢献している。その磁器受け入れ先はアルザスであり、この意味でも、ストラスブール大学講師のミュラール・デルフィンヌ氏がアルザス州所蔵の日本作品カタログを調査しており、三月にはともに調査し、アルザスにおける日本製品（型紙、鏝、工芸品、陶磁器）の受容と応用美術の発展史を再考察し、さらにそれらのデザインとの比較研究も行う予定である。そうした準備も今回の助成で行えたことも成果の一つであろう。

日本と欧州に所蔵される型紙研究は誰も行っておらず、日本での型紙研究者は5人ぐらいであり、こうした新しい研究をジャポニズムと絡めて行うことは、国文研究者のみならず、多くの研究者に刺激を与えるであろう。また、フランスのテレビ局であるATREが興味を示しており、2024年3月に接触予定でもある。

4. キーワード（本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載）

①型紙	②美術	③道具	④和紙
⑤ジャポニズム	⑥産業	⑦	⑧

5. 主な発表論文等（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

現在執筆中であり、2025年末までには本として、出版予定である。